

月曜寸言

天安門事件の基本的性格は、「反文化大革命」であったのだが、この五月十六日は文化大革命のいわゆる「五・一六通知」が出てから十周年とこのことで、「人民日報」「紅旗」「解放軍報」が久々に共同執筆論文「文化大革命は永久に光り輝く」を

「一六の共同執筆論文であること 光り輝く」。

を中国側も認めたことがある。永遠の時間のなかに革命の我これらの論文は文化大革命の勝利を鼓吹し、同時に「階級闘争」を大いに力説して「敵」は党内にこそ存在することを強調しているのだが、毛沢東主席は

たという。銃殺された一人は、「大鳴、大放、大民主」とかいかつて文革期に「造反外交」の花形として活躍し、のちに極左分子として失脚した姚登山・前駐インドネシア大使の子息であるらしい。この報道が正しければ、姚父子は、毛沢東政治のあ

銃殺刑

中嶋信雄

て、そのたびに毛沢東政治への大衆の鬱憤はつのもつてゆくであろう。

最近、一今後、百年、千年も革命が心要だろうか。やはり革命をやらなければならぬ。……一万年後に矛盾は見られなくなるといふのか。どうして見られなくなくなるか。見られるはずである」とも述べたという

最近、一今後、百年、千年も革命が心要だろうか。やはり革命をやらなければならぬ。……一万年後に矛盾は見られなくなるといふのか。どうして見られなくなくなるか。見られるはずである」とも述べたという

まりにも痛ましい犠牲者である。文革中にも北京では「反革命分子」が大衆裁判のあと銃殺刑に処せられたし、五七年の反右派闘争のときにも漢陽第一中学校ストライキ事件の首謀者の三名が銃殺された。中国では「造反有理」とか